

☆本年度課題への

着眼点

(大阪) 中島龍太郎

あと数日したら研究室員学生二十数名で富山県の庄川上流の村に調査にでかけますが、秋の大会は大阪でやるということだし、何か討論の材料でも得ておきたいとあれこれ考えております。本年度課題「農家人口の変動と家族構造」については、貧しい過去の経験と勉強から次の様な点を心覚えにしております。一、調査項目や方法などについては、前の通信ではよくつくされているので特に加えること

はありませんが、餘り網羅的になりすぎて調査の焦点が、したがって結果報告のねらいがぼけることのない様、それぞれの中心題目をしぼることが必要かと思ひます。例えば家族関係の変化とか、人口移動のタイプとかは、地域により、また階層によりさまざまに異つて一般的条件と特殊条件を結びつける研究者の問題意識をはっきりさせ、それが事実によつてどう裏書きされているかを明らかにしたいこと、二、少数例であっても、いろいろな事項との結び付きによく気を配つて、正確なデータを集めていくこと、三、過剰人口の測定は理論的にも、また実証的にもなかなか困難な問題であつて、それだけでも手にあまることが多いと思ひます。農家の生活水準と労働力構成の関係について、一律には行かなくとも地域毎の基準を考へておくことが必要でしょう。愛媛県の標本農家について行われた安達生恒氏の方法(農村過剰人口の測定と分析 愛媛大地池社会総合研刊一九五五年)は、農家経済調査等による(1)消費水準の決定額と家計費との比(2)就業日数、(3)転業意志、によつて就業の類型と判定をきめておりますが、(4)はともかく(1)についての標準線を考へておくことが大切でしょう。

このほか、秋の大会では、たとえ完結した報告の形でなくとも、自由に多くの人が課題について話し合えるような講事運営の習慣が成長することを期待しております。

(一九五五、八、一誌)